

見本

保育原理

第3版

はじめて保育の扉をひらくあなたへ

咲間 まり子 監修

中野 明子・林 悠子 編集



見本

●● も く じ ●●

はじめに

第1章 保育とは

第1節 保育の概念—保育とはどのようなものだろう—	9
1 「保育」からイメージすることは？	9
2 「保育」の定義—「養護」と「教育」の意味—	10
第2節 保育の理念—こどもの権利と保育—	75
第3節 保育の社会的意義	79
1 こどもの育ちを取り巻く状況と保育者の役割	79
2 保育への国際的関心の高まり	20
3 国内の保育議論から考える保育の社会的意義	27
4 指針・要領等の改定（改訂）に見る保育の社会的意義	22
COLUMN 「保育ノート」のすすめ	25

第2章 こどもの発達とこども理解

第1節 「こども」について考えてみよう	27
1 「こども」のイメージとは	27
2 「こども観」という視点	28
3 「こども理解」とは	28
第2節 各年齢における「こども理解」	30
1 乳児について	37
2 1歳以上3歳未満児について	32
3 3歳以上児について	33
第3節 こどもの遊びを見つめることで見えてくるもの	35
1 遊びのなかに見られるこどもの本気	35
2 まとめ—「こども理解」とは—	37
COLUMN 「こども」と「子ども」と「子供」	38

第3章 西欧の保育の思想と歴史

第1節 幼児教育の萌芽	39
1 ルソーの教育観	39
2 ペスタロッチの教育観	40

見本

第2節 集団保育施設の誕生	42
1 オーウェンの幼児学校	42
2 フレーベルの幼稚園	43
第3節 こども研究の発展	45
1 エレン・ケイの教育観	45
2 モンテッソーリの教育観	46
COLUMN 「こども期」の誕生	48

第4章 わが国の保育の思想と歴史

第1節 戦前の保育	49
1 幼稚園の歴史	49
2 託児所の歴史	57
3 戦時下の保育	53
第2節 戦後の保育	54
1 幼稚園の発展	54
2 保育所の発展	55
3 教育・保育の一体化に向けた動き	56
COLUMN 保育施設設立の芽生え	58

第5章 保育の場

第1節 「家庭」という保育の場	59
第2節 公における保育の場	67
1 保育所	67
2 幼稚園	63
3 認定こども園	65
4 指針・要領等の改定（改訂）から見える「保育の場」の未来	68
第3節 多様化する保育の場	69
1 地域型保育という保育の場	69
2 多様なニーズに寄り添う保育の場	70
COLUMN 博物館が支える地域の子育て	77

第6章 保育の目標と内容

第1節 保育の目標とは	73
-------------	----

見本

1 乳幼児期の保育・教育における目標	73
2 保育の目標と育みたい資質・能力	77
第2節 保育の内容とは	77
1 こどもの遊びと保育内容	77
2 「保育の内容」の構成	79
3 「ねらい」および「内容」	80
COLUMN こどもの遊び	83

第7章 保育の方法

第1節 環境を通して行う保育	85
1 保育所保育指針および幼稚園教育要領に基づいて	85
2 環境構成上の留意点	87
3 環境を通して行う保育とは	89
第2節 生活と遊びを通じた総合的な保育	90
1 「生活」および「遊び」とは	90
2 生活と遊びを通じた総合的な保育とは	93
第3節 保育における「個」と「集団」の育ち	94
1 保育における「保育者の意図性」の大切さ	94
2 「個」と「集団」の育ちを意識し、意図をもった保育の大切さ	95
COLUMN どんこの魅力	98

第8章 保育の全体的な計画

第1節 保育の全体的な計画とは何か	99
1 保育における計画の全体像	99
2 保育における計画の考え方	100
第2節 指導計画	102
1 長期の指導計画と短期の指導計画	102
2 指導計画の作成手順と展開	108
3 指導計画に関して配慮すること	110
第3節 記録と評価	117
1 保育の記録	117
2 反省と評価	113
COLUMN 「遊びから読み取る」記録の工夫	116

見本

第9章 保育者の専門性

第1節 保育者の専門性について考える	177
1 保育者の専門性とは	177
2 「総合的な指導力」とは	178
3 専門性を支える「豊かな人間性」とは	179
4 専門性を支える「幅広い教養」	120
第2節 「理想の保育者」について考える	127
第3節 「自己肯定感」を育むために	122
1 「自己肯定感」とは	123
2 こどもをめぐる問題	124
第4節 こどもと向き合ううえで「大切なもの」とは	125
1 心を育てる教育	125
2 こどもから学ぶ	126
第5節 保護者への支援	127
第6節 保育者の研修について	128
1 キャリアパスについて	128
2 キャリアアップ研修ガイドラインについて	129
3 保育者となって、研修を受けることの意義と意味	130
COLUMN ピアノが弾けなくて悩んでいるあなたへ	137

第10章 子育て支援と連携

第1節 子育て支援の必要性	733
1 子育てを支援するということ	733
2 子育て支援の原則	734
3 子育て支援の対象と特性	734
第2節 児童虐待の防止と子育て支援	735
1 児童虐待の現状	735
2 児童虐待防止における就学前施設の役割	736
3 児童虐待への対応のために	737
第3節 子育て支援の担い手と連携の必要性	738
1 地域における子育て支援機関や事業	738
2 連携のために	739
第4節 特別な配慮を要する場合の子育て支援	740
1 障がいのあるこどもと家庭	740
2 こどもの貧困	740

見本

3 外国につながる家庭	747
第5節 保幼小の連携	747
1 保育所保育指針等に見る保幼小の連携	747
2 スタートカリキュラム	742
COLUMN ワーク・ライフ・バランスと子育て支援	743

第11章 諸外国の保育

第1節 スウェーデン	745
1 スウェーデンの概要と保育システム	745
2 フォスコラの保育の環境	746
3 保育の内容	747
第2節 アメリカ合衆国	749
1 アメリカ社会の特徴	749
2 アメリカにおける保育の特徴	749
3 アメリカにおける多文化保育	757
第3節 韓国	752
1 就学前の保育・幼児教育体制	752
2 保育の歴史	754
3 保育課程	755
4 主題中心の保育活動	755
5 環境構成—領域別のコーナー保育—	756
6 今後の展望	757
COLUMN 伝統文化を取り入れた保育活動	758

第12章 保育の現状と保育者をめざすあなたへ

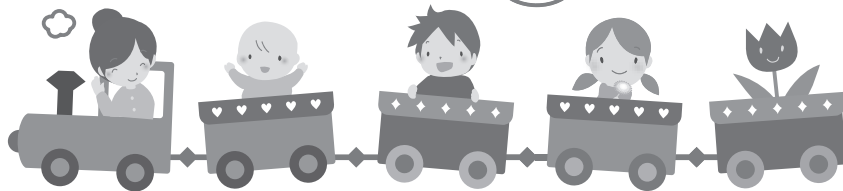
第1節 保育をめぐる近年の状況	767
1 こどもや子育て家庭を取り巻く状況	767
2 子ども・子育て支援新制度	766
3 多様な保育サービス	768
第2節 保育の世界の扉を「ひらく」あなたへ	777
1 保育者の現状と政策	777
2 保育現場で活躍している先輩からのメッセージ	773
COLUMN 伝える言葉・伝わる言葉	776

索引 779

ふりかえりシート 787

見本

第1章 保育とは



✿ 本章のサマリー

本章では、「保育」とはどのような営みなのかということ、「保育という言葉に込められた意味」「こどもを尊重すること」「社会的意義」の3つの観点から学んでいきます。今、みなさんが考えている「保育」のイメージをスタート地点として、本書を通して学びを深めていくための導入の章となります。

第1節 保育の概念—保育とはどのようなものだろう—

💡 考えてみよう！

保育という言葉からあなたがイメージすることを書き出してみましょう。また、グループで保育のイメージを共有してみましょう。

1 「保育」からイメージすることは？

① こどもの視点からのイメージ

保育者*¹を目指して本書を開いているみなさんは、保育という言葉から何をイメージしましたか。筆者の授業で学生からあがってきたのは、「遊び」「運動会や遠足」「給食」など、そのほとんどが自分の乳幼児期の思い出に関連した、こどもの視点でのイメージでした。みなさんの多くが、保育所や幼稚園に通った経験があることでしょう。その当時の経験を具体的に思い出すことができなくても、その経験は現在のあなたを形づくる根っこの部分になっているのではないのでしょうか。

*1 保育者
本書では、保育士、幼稚園教諭、保育教諭を総称して「保育者」といいます。

見本

フルガム (Fulghum, R.) は、その著書『新・人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ』で次のように述べています。「人間、どう生きるか、どのようにふるまい、どんな気持ちで日々を送ればいいのか、本当に知っていきなくてはならないことを、わたしは全部残らず幼稚園で教わった」¹⁾。フルガムが幼稚園で教わったことの中には、「何でもみんなで分け合うこと」「人をぶたないこと」「誰かを傷つけたら、ごめんなさい、と言うこと」²⁾などが挙げられています。そして、これらのことを「大人向けの言葉で置き換えてみるといい」³⁾といます。「大人向けの言葉で置き換え」た時、みなさんにも思い当たることがあるのではないのでしょうか。では、フルガムはこれらのことを、幼稚園でどうやって学んだのでしょうか。

フルガムが幼稚園で教わったことと、みなさんがイメージした「保育」とはどのように結びつくのでしょうか。この問いについて考えることは、保育とは何かを考えることにつながります。

②保育者の視点からのイメージ

では、保育者の立場からみると、「保育」はどのようにイメージできるのでしょうか。筆者の授業では、学生から、「こどものお世話」「遊ばせる」「歌を教える」「教育」などのイメージがあがってきました。これらのイメージで用いられている「お世話」「教育」とは、より具体的にはどういう意味なのでしょう。か。「遊ばせ」たり、「歌を教え」たりする目的は、何なのでしょう。か。また、「お世話」「遊び」「教育」は、相互にどう関係しているのでしょうか。この点について考えることも、保育とは何かを理解することにつながります。

2 「保育」の定義—「養護」と「教育」の意味—

①乳幼児期への考慮

ここでは、「保育」とはどのようなものだと定義されているのか、いくつかの文献を取り上げながら考えてみましょう。

『保育用語辞典』では、「保育という用語は、広義には保育所・幼稚園の乳幼児を対象とする“集団施設保育”と、家庭の乳幼児を対象とする“家庭保育”の両方を含む概念として用いられているが、しかし、一般には狭義に保育所・幼稚園における教育を意味する用語として使用されている」⁴⁾と述べられています。

また『保育小辞典』では、「乳幼児の心身の発達を目的として、幼稚園、保育所などでおこなわれる、養護を含んだ教育作用のことである。広義には、

家庭の乳幼児を対象におこなわれる育児も保育と呼ぶ⁵⁾とされています。

このように、一般には、保育所・幼稚園・認定こども園（以下、「就学前施設」という）における教育を保育と表すことがわかりました。では、なぜ小学校以上と同じように「教育」といわず「保育」というのでしょうか。『保育用語辞典』の続きを見てみましょう。

「このことばの由来は定かではないが、幼児教育の対象となる幼児が幼弱であるために、保護し、いたわりながら教育することの必要性が考慮されていたものと思われる⁶⁾とあります。乳幼児期のこどもたちは特に「保護」「いたわり」をもって教育する必要があることを、「保育」という言葉で表しているといえます。この世に誕生してわずか数年のこどもたちに対して、その命を守り、愛情をもって温かく関わるということが、教育を行ううえでの基盤となることを意味しているのです。

②保育における「養護」の意味

乳幼児期に特に必要な「保護」や「いたわり」は、こどもの生命の保持および情緒の安定を図るための援助であるといえます。保育者が行う保育の基本を記した「保育所保育指針」（以下、「指針」ともいう）では、こどもの生命の保持と情緒の安定を図ることを「養護」と表現し、保育とは「養護」と「教育」の一体的な営みであるとされています。英語では「保育」を表す場合、“early childhood care and education”または“early childhood education and care”が用いられています。英語表現においても、保育は「care」と「education」が一体的に営まれるのものとして表されているのです。

「養護」が乳幼児期のこどもの育ちの基盤になることは、「保育所保育指針」および幼稚園教育の基本が示された「幼稚園教育要領」（以下、「要領」ともいう）の解説書である「幼稚園教育要領解説」にも書かれています^{*2}。

保育所保育指針 第1章総則 1 保育所保育に関する基本原則 (2) 保育の目標 ア

(ア) 十分に養護の行き届いた環境の下に、くつろいだ雰囲気の中で子どもの様々な欲求を満たし、生命の保持及び情緒の安定を図ること。

幼稚園教育要領解説 序章 第2節 幼児期の特性と幼稚園教育の役割 1 幼児期の特性

(1) 幼児期の生活 ①生活の場

(前略) 幼稚園生活が幼児にとって安心して過ごすことができる生活の場となるためには、幼児の行動を温かく見守り、適切な援助を行う教師の存在が不可欠である。

* 2
幼保連携型認定こども園については、その保育の基本を示したものとして、内閣府・文部科学省・厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」（以下、「教育・保育要領」ともいう）があります。

見本

このように、乳幼児が保護者から離れて過ごす保育の場は、こどもにとって安全かつ安心できる場であることが基本です。一人一人のこどもが、温かく見守ってくれる大人や一緒に遊べる友だちに囲まれ、自分の思いや欲求を表現することができ、心地よさを感じながら毎日の生活を送ることができる、そのためのキーパーソンが保育者なのです。

③保育における「教育」の意味―「保育」という言葉の歴史から―

次に、保育は「養護」と「教育」の一体的な営みであるとされるなかで、「養護」を基盤とした「教育」について考えてみましょう。

みなさんがイメージする「教育」は、小学校から高校までの12年間で経験したような、教科書をもとに授業を受けて知識を得るというものではないでしょうか。しかし、就学前施設では教科書はありません。そういったなかで、小学校以上の「教育」と就学前施設での「教育」を同じようにとらえられるのでしょうか。この点について考える際、「保育」という言葉の歴史を振り返っていくと、乳幼児期の「教育」の意味が見えてきます。

それでは、「保育」という言葉がいつから用いられたのかについて見ていきましょう。『保育用語辞典』には、1876（明治9）年にわが国で最初の幼稚園であった東京女子師範学校付属幼稚園の規則においてすでに用いられているとあります⁷⁾ *³。また、1926（大正15）年に公布された「幼稚園令」は、わが国で初めての幼稚園に関する法令ですが、その条文においても、「保育」が用いられています。「幼稚園令」第1条の幼稚園の目的には、「幼稚園ハ幼児ヲ保育シテ其ノ心身ヲ健全ニ発達セシメ善良ナル性情ヲ涵養シ家庭教育ヲ補フヲ以テ目的トス」（下線部筆者）と記されています。つまり、明治時代からすでに乳幼児期の特性に配慮した教育が行われる必要性が認識され、「保育」という言葉が用いられていたのです。

なお、これは現在の幼稚園でも同様です。「学校教育法」は第22条において、「幼稚園は、義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして、幼児を保育し、幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする」（下線部筆者）と明記しています。このように、乳幼児期の特性にふさわしい教育のあり方を表す言葉として「保育」が長く用いられているのです。

④保育における「教育」とは―生活との密接な関連―

保育という言葉に、乳幼児期の教育がこどもの生活と密接に関わって行われるという意味が込められていることについて、もう少し深めてみましょう。

* 3
東京女子師範学校付属幼稚園規則には、「第7条 園中ニ在テハ保母小兒保育ノ責ニ任ス」「第10条 小兒保育ノ時間八毎時トス」（下線部筆者）とあります。

見本

わが国の保育の基礎を築いた倉橋惣三*⁴は、彼の昭和初期の講義において、幼稚園で行われる「保育」が教育ではないかのような理解のされ方があることに対して「保育は本当に軽い意味のものでないのであるが」⁸⁾と述べ、乳幼児期の教育は、身体と心の両面を区別せずに、生活の中でバランスをとって行われるべきであり、それを表すのが「保育」という言葉であるとしています。つまり、こどもの食事や着替え等、こどもの日々の生活に関わりながらでなければ教育はなしえないということがいえるでしょう。倉橋はさらに、「幼児を教育するにはその生活によらなければ出来るものではない」「保育の保育たるところは生活にふれることだ」⁹⁾と述べています。

また、倉橋はその著書において、生活から切り離されて行われる抽象的な教育は、幼児において避けるべきであると明言し、一例として清潔に関する教育を示しています。

* 4
倉橋惣三について、詳しくは、第4章(p.51)を参照。

簡単な例が、幼児に清潔といふことを教育しようとして、普通の幼稚園で、たゞ其のお話だけして聞かせたとて、抽象的に、清潔に関する知識と法則とを教へ得るに過ぎない。それが、実際に、入浴させてやり、着物をかへてやりしながら、此の教育をしていつたならば、如何に、眞に具體的な、清潔生活そのものの教養が行はれ得るか分からない。

(出典：倉橋惣三「児童保護の教育原理」(1927年『社会事業大系』第2巻所収論文)『大正・昭和保育文献集』第8巻 日本らいぶらり 1978年 p.31)

例えば、思いっきり遊んで汗まみれになったこどもにシャワーをして着替えをしながら、「さっぱりしたね」と保育者が言葉をかける場面を思い描くとよいでしょう。清潔にすることの心地よさを、こどもは日々の生活での経験を通して、保育者の援助を得ながら学んでいくのです。80年以上前に倉橋によって述べられた、乳幼児の生活に密接に関わりながら教育するという保育の意義は、現在にも受け継がれていることが理解できるでしょう。

こどもの生活と密接に関わりながら行う教育と、小学校以降の教科書を使った教育との違いにみなさんも気がついたのではないのでしょうか。それは、第1項で引用したフルガムが幼稚園で学んだことにもつながります。例えば、次の事例から保育における「教育」の意味が考えられるかもしれません。

見本

*12

「3つの資質・能力の柱」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について、詳しくは、第6章（p.77）を参照。

育から小学校教育への連続性を大切にした関わりをめざし、5領域を踏まえた「育ちの方向性」¹³⁾として示されています*12。

⑤保育の質向上の重視

保育の質の向上へ取り組みの強化を図ることがいっそう明確に記されました。実践を振り返り、次の実践につなげる循環を、保育者一人一人と組織全体とが行うことが求められています。

以上のように、2017(平成29)年改定(改訂)の保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領では、保育の社会的意義が明確に打ち出されたといえます。こどもと社会全体にとって、質のよい保育が重視される今、保育者を目指すみなさんこそが、その担い手となることを自覚し、保育の学びを重ねていただきたいと思います。

次章では、保育の出発点である、こども理解について学びます。

「保育ノート」のすすめ

これから保育の学びを始めようとしているみなさんに、おすすめしたいことがあります。それは、保育についての学びや気づきを記録するための「保育ノート」をつくることです。

保育者になって働き出したときによく振り返るのが、保育実習の記録です。筆者も過去に実習を経験し、その後保育の場で働き出してから、学生時代の実習記録を何度も読み返しました。なぜなら、保育で悩んだとき、初心に戻りたくなるのです。「あのとき、私はこどもとの出会いでどんなことを感じていたのだろう」「こんなふうががんばっていたんだ」と実習時を振り返ると、また明日からがんばろうという意欲が湧いてきました。

今、保育の学びのスタート地点にいる人も、その途中の人も、今のあなたの保育に対する思いを記しておくことは、自分自身の成長のプロセスを記録していくことになります。それはきっと、今後の保育者としての歩みにおいて重要なものとなります。

保育に関するどんなことでも、自分が気づいたこと、心を動かされたこと、疑問に思ったことをメモしてみませんか。たとえば、こどもと関わって思ったこと、本を読んで感じたこと…小さなことを小さくメモし続けていくのです。筆者が関わる学生にもすすめたところ、さっそく「保育ノート」をつけ始め、見せてもらうと、その日その日の小さな気づきが書き込まれていて、この積み重ねこそが、保育者へのプロセスなのだと思います。

保育ノートを書いている学生Yさんは、「保育ノートを読み返すと、そのときの自分とこどもとの関わりを鮮明に思い出せます。その日のこどもたちとの関わりを振り返り、次の保育に生かしていくための視点をもてるようになってきました。また、あるこどもがいつの間にか人見知りがなくなっていたのですが、保育ノートを振り返るとその過程が記されていて、自分の保育の記録だけでなく、こどもの育ちの記録にもなっていることに気づきました」と感想を寄せてくれました。

みなさんも、ぜひチャレンジしてみましょう。



(イラスト：森山 大雅)